令和元年度第５回　第三吾嬬小学校　校長「語らいサロン」

テーマ『世界につながる第三吾嬬小学校の教育』

令和元年１２月７日（土）9:00-9:50　　応接室にて

参加者　保護者４名（＋お子さん２名）

川中子　おはようございます。ご参加いただき、ありがとうございます。第三吾嬬小学校には、外国人のお子さん、外国につながるお子さんがたくさんいます。今日は「世界につながる第三吾嬬小学校の教育」というテーマでお話しできればと思います。今日は、初めに体験談として、私とこちら、音楽のＭ先生の方から話をさせていただき、その後で、皆さんからのお話もお伺いしたいと思っております。

Also.　Guten Tag!　Herzlich Willkommen!　Ich bin Direktor an der Daisan-Azuma Grundschüle, Sumida Stadt, Tokio.　Ich heiße Kawanago Toshio.　Ich freue mich Sie zu sehen.　Danke schön.　（ドイツ語でご挨拶）

私は 2002 年から３年間、ドイツで生活をしていました。デュッセルドルフという町ですね。ちょうど、行ったときに、妻が妊娠しておりまして、８ヶ月の時に飛行機に乗って行って、着いてすぐに病院を探して出産ということがありました。５月２６日に一番下の娘が生まれて、その時の写真です。

デュッセルドルフという町は日本人がとても多いところで、ドイツで働いている人ばかりでなく、そこを拠点としてヨーロッパ中の都市で仕事をしている方が集まっているところでした。約５００キロでヨーロッパ中の全ての大都市が入ってくる町ですね。気候はドイツの中では温暖で、近くにライン川という大きな川が流れていて、比較的温かいところでした。一番寒くてもマイナス５度くらいでしたね。ただ、東京よりもずっと北に位置しているので、夏は朝から１１時頃まで明るく、冬は登校する時間は真っ暗で３時過ぎから暗くなってしまう感じでした。

私はこんな感じのマンションに住んでいて、日本人の多いところでしたから生活に困ることもあまりなかったです。日本食も手に入ったので、住みやすいところでした。

子供たちが日本人学校に通って。私が、日本人学校に勤めていましたので。３番目の娘がドイツの幼稚園に入って、ドイツ語の環境の中で生活したという経験がありました。日本人学校の中は、日本の学校とそんなに変わりませんので、子供たちもそんなに困ることはなかったんですが、３番目の娘が４歳くらいだったかな？ドイツの幼稚園に入って、そこはインターナショナルの幼稚園で、いろんな国の子が入っていました。ドイツ人はもちろん、ロシア人、アメリカ人、それに日本人の子も結構いました。生活そのものはドイツ語で進められているわけです。こんなに小さい子どもでも、違う言葉の環境に入ると、非常に苦労するのだか、最初の数ヶ月は幼稚園から帰ってくるとぼーっとお菓子を食べて、戻して、っていう過食症のような事になっていたり、夜中に突然起きて泣き叫んだりするような事がありました。そういうときを乗り越えて、そのうち友だちともドイツ語でぺらぺらと話せるようになりました。

まあ、私たち自身は日本語で生活していましたし、そんなに困ることもなかったのですが、それでも日本にいるときとは違う、いろいろな経験ができたかなと思います。で、ちょうど同じ時期に、同じようにお父様のお仕事の関係で海外に行っていたのが Ｍ 先生で、ちょうどうちの２番目の娘が３年生だったんですが、同い年でロンドンの現地校に通っていたそうです。現地校に通った Ｍ 先生に来てもらって、今日はその時の気持ちとか、どんなだったかについて話していただこうかなと思っています。

Ｍ 先生　私は小学校３年生から５年生まで、父が教員をしておりまして、川中子先生みたいな形で、お父さんについて行って。お父さんは日本人学校と言ったんですけど、「日本人学校」というのは月曜から金曜まで授業がある学校で、父は「日本人補習校」という土曜日に国語と算数の授業をしている学校に勤めていました。それに私がついて行ったという感じです。で、ロンドンではなくて、ロンドンから車で３時間くらい行ったダービーという、みんな知らないだろうというところに行きました。有名な近くの都市だと、マンチェスターとかバーミンガムとか、ロビンフッドで有名なロッティンガムというところがありました。本当に田舎のところで、羊、牛･･･みたいなところで、隣は牧場でした。あまり日本人はいなくて、私はイギリスの公立の学校に通って、土曜日だけ日本の学校に通うという生活をしていました。

やはり、最初に行ったときは、父の都合で行ったわけで、自分の名前だけはアルファベットで書けるようにして、それ以外は A,B,C,D･･･の歌だけで、私はついて行かされて、急に現地の学校に転校して、イギリスの私と同じ学年の子と一緒に授業を受けました。最初はやはり、分からなかった。日本の教育のとシステムが違って。私は１，２年は日本の学校を経験してから行ったんで。例えば、朝会があるんですけど。普通だったら、「体育座り」なんですが、あっちの学校ではあぐらをかいて腕組みするのが一番いい姿勢だったりとか。後は、日本の学校は鉛筆をもつんですが、イギリスの学校は、算数以外はペンで書かないといけないんです。だから、文法も分からなくて、綴りも分からないから、間違うことが多くすごくぐちゃぐちゃぐちゃっていうノートになったりして。ペンで書かなければならないという恐怖感だったり、いろいろ細かなことでもストレスになったということがあったりもしたんですけど、私の場合は幸い、友だちにすごく恵まれまして、とても優しい子達が多い学年だったので、すぐ「遊ぼう！」っていってくれたり、誘ってくれたのが、現地校に行きたくないな、英語が分からないからいやだなと思うことはあったんですけど、友だち関係とかで苦労すると言うことは私はあまりなかったのでよかったです。

私の二つ下に妹がいるんですが、１年生に入ってきて、日本の学校を経験せずにそちらの学校に入ったので、いろいろ大変だったみたいです。例えば、嫌がらせを受けたりした時とかに、泣いたりして、言葉も分からなくて、先生にも言えないしみたいな感じで、「ちょっとリカを呼んできて！」って授業中とかにも呼び出されて妹が泣いているので、なんで泣いているのか説明してほしいと言われても。私も分からない！日本語では分かるけれど、例えばつばをかけられたって言っても、それを（英語で）なんて言えばいいか分からないなんてことがありました。それでも次第に仲良くなって、英語も徐々に分かるようになって、まあ３年しかいなかったんですが、３年経つ頃には授業の内容も分かるようになったりしました。すごく楽しい、いい３年間だったなあと感じています。今でも、子供たちと接するときに、この学校に外国籍の子もいますので、その気持ちだけは分かる！っていうのはあります。

今でもその当時の友だちとはＳＮＳとかでつながっています。英語も忘れてしまいましたが、どうしてる？今、音楽の先生をやってるんだなんてやり取りをしています。

川中子　現地の学校で、違う言葉の環境の中で生活するというのは、とても大変なことですが。K くんも T くんも、生まれは日本ですか？

A、B さん　はい。

川中子　そうすると、もう日本語の環境の中で育っていると言うことですかね。おうちではいかがなんですか？

A さん　K は、９割日本語、ですかね。

川中子　お父さんとは？

A さん　お父さんと K の間は、半々くらいかも知れないですけど、あんまりお父さんと一緒の時間がないので。あんまり英語は･･･。

川中子　T くんはどうですか？

B さん　うちは、だんなが日本語があまりできないんで、二人とも言われることは分かるんですが、返すのは英語じゃなくて日本語、になっちゃうんですね。

川中子　そうすると二人とも、母語という意味では、日本語の方が強いでしょうかね？　うちの３番目の娘も、幼稚園に通っていた頃はぺらぺらしゃべっていたんですが、日本の学校に通うようになったら半年くらいでほとんど忘れちゃってましたからね。子どもは、覚えるのもはやいけれど、忘れるのもはやいです。

そうすると、二人とも１年生の時からこの学校に入って今通っているわけですが。どうですか、何か学校生活のこととかで、本人が困っているようなことはありませんか？

B さん　あります。２年の時に１回あって。担任の先生にも相談して。肌の色だとか、外見上のことを言われるのがすごくいやなんですね。肌が黒いとか、髪の毛がまっすぐじゃないとか言われたりするのは、すごくいやだし、本人もいやがっています。ガイジン、って、差別用語じゃないですか。まあ、ガイジンとは言われたことはないんですが、よく「何人なの」って言われたりして。何人なのって、日本人だよって言うようにさせてるんです。色が黒いっていうのも、ダディの肌が黒いから、日本の黄色と混じってこういう色なんだよって、日本人は白じゃなくて黄色だよ、アメリカ人とかは肌の色が白と話したりしています。やっぱり、そういう差別とかが、未だに結構あるなあと言うのは感じますね。それが、高学年になって、減っていくのかなあというのもちょっと気になっています。

川中子　そうですね。むしろ、小さい頃の方が、自分と違うことについて、単純に「何で違うんだろう？」って口からでることもあるかもしれませんね。だんだん大人になっていくと、そういうことを理解していくんだろうし、言うべきことと言わない方がいいことと言うのも分かってくると思います。でも、日本で暮らしていくって言うことは、私も周りに外国の方は本当に少なかったですし。まあ、アジア系の方はいたのかも知れませんが、見た目であまり分からないと言うこともあったのかもしれません。私は足立区の西新井の出身ですが、当時は朝鮮系の方がたくさん近所に住んでいました。けんかになることもあったり、親があの子達と遊ぶなといったりはありましたね。

　そういう意味では、日本では、同じ違うっていうのはとても大きな問題で、それを強く意識してしまうということはあったんじゃないかなと思います。それが、だんだん、世の中が変わってきていますので、例えば、スポーツとかで活躍している人でも、見かけは日本人に見えないけれど、日本語を話して名前も日本人の名前で、っていうのも普通になってきましたよね。そういう意味では、欧米に比べたら遅れた感じではあるとは思いますが、変わってきているのは間違いありません。これからはどんどんそれが進むのは間違いない事です。それをどう克服していくか、というのは、私たちの大事なテーマじゃないかなと思うんですよね。学校でもしっかりやっていかなければいけないなと思います。ありがとうございます。えー、K くんはいかがですか。

A さん　うちは、今までそういうことはなく来ているんですが。やはり、お兄ちゃんもいるんですが、K も「何人？」って聞かれることはあって、「日本人と、アメリカ人と両方の国籍をもってるんだよ。」って。子どもはそういうことは分からないから聞いてくるのかなと思って、そうなんだよって教えるようにして。たぶん、国際結婚している人が身近にいない日本人の方はそういうことを知らないと思うので。例えば、アメリカ人の夫と結婚すると、名前は旧姓を使うって言うのが通常なんですよね。変えたいです、っていうと変えられるので。実際、その立場になってみないとわからない事って言うのがたくさんあって。大人も知らないことです。だから、せっかくこういう環境なので、日本人以外の親をもっている場合は、国籍が二つなんだよとか、でも日本人だよね、とか、そういうのがあるといいのかなと、今お話を聞いて思いました。うちはそういうことを言われていないみたいですが、言われているのかも知れないし。

川中子　そうですね。わからないですよね。

A さん　分からないですね。まあ、それは知ろうとしてくれているのかなと言う意味ではいいことだと捉えてはいるんですけど。

川中子　確かに、見た感じが違うって言うお子さんはたくさんいるので、そういうことについて何か子供たちの話って聞いたことありますか？

C さん　ぜんぜんなくて。私も第三吾嬬小学校の出身なんですが、私の時も一人いたんですね。海外のお父さんの方がいて、未だに結構多いなって。第三吾嬬小学校は海外の方が多いなって思います。未だに、差別みたいなことがあるんだなあって。子供たちは全然普通に（受け止めていて）。そういうことを話したこともないです。今、そういうのを聞いて、ちょっとショックです。身近に海外の人がいるって、私はラッキーじゃないかなって思うんですけど。

川中子　D さんはどうですか？

D さん　うちの子は同じ学年の E くんとか F くんとすごく仲がよくて、一緒に遊んでるんですけど。べつに（肌の色）そのことについてああだ、こうだというのはなく、本当に普通の友だちとして、みんなと同じような感じで接しているので、あまりそういう話は聞かないです。

　私も、身近にそういう国際結婚した方がいないので、知らない部分もあるし、意識としてない部分もあるんですが。世界のいろんな文化などを知るっていうことは、これからとっても大事なことだなと思います。子供たちにも、いろんな人とつきあってほしいなと思います。いろんな人がいるんだよ、って、視野を広げていってほしいなと思っています。親として。

川中子　そうですね。そういう意味では、第三吾嬬小学校の子供たちは、そういう機会があるっていうことは、お互いにとってもいいことなんじゃないかなと思います。まあ、本人たちにとっては、普通に学校に来ているだけなんでしょうが、いろんな違いがあって、違いを認め合っていける世の中になって行かないといけないなと。特にこれからは、海外から労働者もいっぱい受け入れてやっていかないと日本は成り立たなくなって行きます。来年、オリンピック・パラリンピックがあって、また世界中の人たちが訪れるでしょう。日本を見て、感じていくんじゃないかなと思います。子供たちは、学校でそういう経験ができるというのは、貴重な事だと思います。

　ですが、お二人とも、日本語ができるので、お友達になるというのもそれほど障壁が高くないかなと思います。やはり、言葉が通じないと、そのあたりの壁はかなり高く、結構衝突が起こりますね。途中から、海外から来た子も結構いますので、日本語がほとんどしゃべれないまま来て。言葉がしゃべれないと、かなり厳しいんですね、友だちになるのが。去年は、コンゴ共和国から来た子がいて、その子はフランス語しかしゃべれなくて、こっちも困ったんですが。だけど、その子は性格的にオープンな感じで、自分から溶け込んでいこうとしていましたので、６年生でもありましたから、周りの子も理解があって、頑張っていたんですが。それでも、やはり、理解し得ないところっていうんですか。例えば、一緒に遊んだりしていても、遊びのルールが分からなかったりするので、それを説明することができなくて、勝手なことをしているみたいになって、だんだん「あいつと遊ぶのはおもしろくない」みたいなことになりがち、と言うこともあります。まあ、そういうときはどうしたらいいか。先生が入って、一緒に解決に努めたりして。まあ、そういう衝突というのはどうしても生じることはあって。それは、生じないのが普通ではなく、生じるのが普通なので、生じた上で次にどうしたらいいのかと考えていかなければなりません。

　A くんも B くんも、将来大人になっていくときにどういう自己実現をしていくかっていうのか。その生活の舞台が日本になるのか、世界になるのか分かりませんが。第三吾嬬小学校に通っている子供たち、普通の日本人の家庭に生まれた子とも達もこれから先どうなるかってことはわからない。これからは、世界で活躍する人が出てくる時代だなって思います。また、そういう風に育てていってほしいし、学校でも育てていきたいと思っています。

　さっき出た、外見のことでいやな思いをしているというのは、何とか克服していかなければなりません。直していかなければ、みんなで理解していかなければなりません。黙っていないでいてほしいし、お互いに理解していかなければなりません。

　おそらく、他の子にはちょっと気付かないことに気付いたり感じたりしながら生活しているんじゃないかなと思います。私もドイツにいたときに、ドイツ人と日本人の親のお子さんを見ていましたが、その子達はやはり独特の発想や、私たちとちょっと違う考え方ができる子が非常に多かったです。それは、いい個性であるので、大事にしていきたい。何というか、新しいものという感じになって行くんじゃないかなと思いますね。これからそういう個性というのは、大事に育てていきたいなと思います。

　そういう意味では、外国につながるお子さんや保護者の方が、学校の教育にも関心を寄せていただいて、これからいろいろとご意見をいただきながら、よりよい学校経営ができたらなあと思っています。

　今日は、中国から来られた方ですとか、アフリカからいらっしゃった方もいらっしゃるので、そういう方にもぜひ来ていただきたかったんですが、なかなかこちらからインフォメーションするのが難しくて、今日、こういうお便りを出していたんです。普通の日本語と、「やさしい日本語」と英語で書いたものなんですが。まあ、なかなか、これ自体を目にすることがない可能性がありますね。あと、学校では、私が着任してから、ホームページも極力英語を併記するようにしています。今年は、給食の献立も英語で説明しているんですが。今年来た N 先生が栄養士の K 先生と一緒にやってくれています。ご覧になったことありますか。

A さん　毎日更新していただいているので、今日、給食何だった？って聞いて、うまく説明できないでいるときは、ホームページを見ています。助かってます。

川中子　（HP を見ながら）N 先生が書いたものを、英語の先生にも見てもらって載せています。英語が分かる人なら、アレルギーのこともあるのでわかりやすいかなと思っています。

D さん　英語は普段あまり見ないので、受験とかしてたとき、こういうのあったなあなんて思い出したりしています。

川中子　例えば、保護者の方も日本語が分からなくて困っていらっしゃる方もいると思うので、できれば、大事な部分だけでも中国語や韓国語でもお伝えできればと思っています。保護者の方で、直していただける方がいたらうれしいのですが。また、充実してくるかなって考えています。

　まあ、そういう意味では、私たちは分からないことも多いので、私たちも困っていることもあるんです。最近は、翻訳機があって、中国から来た子供の指導をしたときも、「何があったの？」なんて、スマホに言って、それが訳してくれてなんてやったりしました。コミュニケーションに非常に苦労します。やはり、言葉が通じないフラストレーションというのはものすごく強いもので、それが間違った形で、例えば暴力的に出たりと言うこともあります。先生に言いなさい、って言っているんですが、その瞬間瞬間に生きているわけで、なかなかうまくいかないことも多い。保護者の方が、うちの子がいじめられているなんて思ったりすることもあるので、保護者の方ともお話をして、少しずつ誤解が解けていくといいなと思っています。

何か、学校として気をつけておいた方がいいとか、こんなことを気をつけてほしいっていうことはありますか。

B さん　私は埼玉の出身で、家の近くに大学があったので、外国の人がたくさんいて、「ガイジン」と呼んだりすると、親に「外国人っていいなさい」って教わったりしました。まあ、子供たちは普通に「ガイジン、ガイジン」って言ったり、肌の色が違うって言ったりしてしまうんですが。人種によって肌の色はちがうんだよ、っていう話も、普段なかなかする機会もないのかも知れません。だから、学校でも、正しい知識を子供たちに授けていただけたらなあって思います。

川中子　そうですね。なかなかそういうことを話題にすることもないかもしれませんね。でも、これからは、私たちが子どもだった頃よりは普通になってくるでしょうね。単純に、周りにたくさんの方がいますからね。いろんな国の方が。

私が子どもの頃は本当に少なかったですね。上野あたりを歩いていても、白人の方に会うなんてことはほとんどなかったですね。一度だけ高校生の時に、アメリカ人に話しかけられて、その時うまく英語で答えられなくて、それが英語の教師になったきっかけにもなりました。

D さん　今は本当に、いろんな国の人がいて、浅草あたりでは日本の人のが少ないくらいですね。いろんな言葉が飛び交っています。

川中子　本当ですね。ですから、正しい知識や理解というのは、学校でもできることがあるので、しっかりと取り組んでいきたいです。

D さん　カウンセラーの先生が英語ができたら、子どもも安心なのかなって思うんですけど。なかなか、それも難しいのかなって。

川中子　そうですね。公共の施設でも、外国語が話せる人はほとんどいなくて、遅れていますね。そういう意味では、日本はまだまだ、英語が日常的に普通に通じるまでにはなっていませんから、これから、っていうことですね。

子供たちもいよいよ来年から、5，6 年生は教科になっていくんですが。難しい課題ですね。

はい。では、そろそろお時間となりました。今日は、こういう状況があって、学校で何かできないかなと言うことで設定させていただきましたが、今日いらっしゃってない方の話なんかもぜひ聞いてみたいなと思っています。ぜひ、何か困ったことがあったら、学校にお話しいただいて、一緒に考えていきたいなって思っていますので。また、何か、お手伝いしていただけることがあったら、お願いしたいなと。そういう意味で、私は、この学校にはいろんな子がいる、ってことが、とてもすてきなことだと思っています。

今日は寒い中、どうもありがとうございました。